
ジゴロ

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジゴロ

【Nコード】

N5609V

【作者名】

ビッキー・ホリデイ

【あらすじ】

遊びやギャンブルで借金を作ってしまった主人公は、金を稼ぐためにヤスタという男から仕事を紹介してもらう。その仕事とは女性の客とデートをする、というもの。いろいろな女性と出会い、求められるものも違うが、主人公は求められるがままに「仕事」をしていく。この小説は「ブクログ」にも投稿しています。

吸い殻で溢れそうになっているスチールの灰皿に、俺は無理やり煙草をねじ込んだ。それから大きく息を吐き、目の前の使いこまれたトランプの山札に手を伸ばした。正面であぐらをかきニヤニヤと下卑た笑みを浮かべている男、ヤスタは、俺が引いたのを確認するとまるで肩に付いた埃を払うかのように山札からカードを引いた。カードは裏返したままだ。

お互いにゆつくりとカードを自分の額にもっていく。さあ、どうなる。俺は、まだ初夏になったばかりだというのに腋に汗がべとついていた。部屋は閉め切っていて暑いくらいだった。しかしそれはただ単に緊張と興奮で俺の体温が上がっているからなのかもしれない。ヤスタはまだニヤニヤと笑っている。俺は目線を持ち上げ、奴の額にあるカードを見た。

スペードの9だった。俺はそれを見た瞬間に、どうしてこんなことになったのかと泣きたいような気持ちになった。自業自得は百も承知、けどどうしても不条理な気がしてならなかった。俺は齒を食いしばり、今度はいま自分が座っている、ボロボロになった畳の目に視線を移した。

「さあ、どうするんだ」

ヤスタが酒灼けしたようなしゃがれ声で言った。俺は睨みつけるように顔を見た。

「お前からなんだ、黙ってたら始まらねえだろ。今すぐに金が欲しいんじゃないかったのか？」

俺はその言葉に押されるように「一万」と言った。奴は鼻で笑い、「チキン野郎が」と呟いた。それから「二万」と嘲るような目つきで俺を見、言った。

「『今すぐに金が欲しい』って言うから、インディアンポーカーにしたんだぜ。それをレートの最低額から始めるなんぞ、よっぽど自

分に自信がないのか」

ヤスダはハッハと笑うと体勢をあぐらから立て膝にした。「それともよっぽど俺の役が強いのか？」

インディアンポーカーはカードを一枚、プレイヤーに見えるように自分の額にもつけていき、親が賭け金を言い、勝負から降りる子を募る。降りる子がいなくなったら親は即勝負するか、賭け金を倍にして即勝負するか、賭け金を倍にしてまた降りる子を募るか、いずれかを判断し、手札をオープンして一番強い役のプレイヤーが、張った賭け金を総取りする、というゲームだ。

いまやっているのはもっとシンプルで、親はおらず交互にレートをつり上げていく方式だ。レートは青天井、つまり上限が無い。勝負から降りた場合は、そのときのレートの半分を支払わなければならない。役は通常通りキングが一番強く、エースが一番弱い。つまり数字が大きければ大きいほど強くなる。スートの強さは強い順にスピード・ハート・ダイヤ・クラブとなる。

俺はもう一度ヤスダのカードを見た。やはりスピードの9だった。まずいなと俺は心の中でため息をついた。勝率は三割ちよいといったところか。ここは降りよう。いや、それではダメだ。インディアンポーカーとはウソとハツタリでどうとでもなるゲームだ。確率論だけのゲームではない。

「しかし、お前も馬鹿なことをしたよなあ」

ヤスダは黄ばんだ歯を見せた。俺は黙っていた。なにも返す言葉が見つからなかったのだ。奴の言うとおり俺は本当に馬鹿な真似をした。そうして俺はこの薄汚いアパートの一室で薄汚い男と博打を打っている。

「で、どうするんだ」ヤスダはさも面白げに俺を見ていた。

「降りるよ」俺はそう言った。この回はどうも勝てる気がしなかった。それをあからさまに見せてしまった以上、ここは降りるしかない。俺は山札にカードを戻すときに自分のカードを見た。クラブの8だった。まあ、仕方のない結果か。いや、弱気にならなければ勝

てたかもしれない。俺は安堵半分後悔半分の気持ちで足下に置いてある一万円札を一枚、男に渡した。

「じゃあ、次は俺からか」

ヤスダは手際よくシャッフルして畳に置くと、さつと山札からカードを取った。俺もそれに倣うようにカードを取ったつもりだったが、どうしても恐る恐るという感が否めなかった。お互いにカードを額までもっていく。男のカードはダイヤの6だった。微妙だが、これはイケるかもしれない、ワンチャンあるかもしれない。額から視線を落として目を見ると、さつきよりも余裕のある表情だった。ダイヤの6だぞ？俺はヤスダのその顔が不気味に思えてしかたがなかった。そしてヤスダが口を開いた。

「五万」

俺は瞬間冷凍されたように、目を見開いたまま固まってしまった。

あのときは本当に馬鹿なことをしたと思う。しかしそれと同時に運が悪かったとも思う。俺は毎月振り込まれる奨学金に手を出し、飲みに行ったりパチンコでスツたりとしているうちにあつという間にその月の奨学金を使い果たしてしまった。そのときは、学費は毎月払うわけではないので支払日までに使った分を捻出すればいいと気楽に考えていた。

それから数日経ち、俺は大学のゼミで知り合った奴の家で麻雀をしていた。最初は和気あいあいと打っていたのだが、どうもその日はツイていたので欲が出てしまった。奨学金のこともあり、俺はついでにイカサマもした。そうして調子に乗って脇目もふらずにアガリまくった。

それがいけなかった。

三人のうちの一人が「てめえ、いまなにやった？」と俺の右手を掴んだ。そのとき俺は右手で、手牌の中の不用牌を山につけるとこ

ろだった。

南無三。俺は狭い部屋の中で三人に囲まれてぶん殴られた。為す術もなくリンチされ、俺は気絶した。気がつくと俺は大学近くの川辺にいた。痛む身体を無理無理起こしてポケットの中を確認すると財布も携帯も煙草もちゃんとあった。しかし財布は金がすっかり抜き取られていた。幸いにもクレジットカードや定期券などは入っていたので、どうにか家に帰ることはできた。その後はバイトの給料日までクレジットカードを使ってどうにか暮らしていた。

奨学金にクレジットカードの返済。とてもバイトだけでは返せない。分割ならなんとかなるにしても一括で返さなければならぬので、俺は相当追い込まれていた。サークルの飲み会のときに、俺はそのことをポロッと先輩に漏らしてしまった。先輩は俺にヤスダという金持ちの知り合いがいると言った。

すぐにヤスダと連絡を取り、アポをとってくれた。ヤスダ曰く「タダで貸すのはつまらないし、そいつ（俺のことだ）も信用できない。だから俺と勝負するなら考えてもいい」

俺は約束の日に先輩から教えてもらったヤスダの家に行った。そこは大学の近くにある学生向けのアパートだった。ドアをノックするとしばらくして軋む音を立てながらゆっくりと開いた。中からはスウェットを着た痩せぎすの男が出てきた。目はここのそばを流れているドブのように淀んでいて、無精髭が顔の下半分を覆っていた。「入れ」

ヤスダはそう言うところりと背を向けて奥へ行ってしまった。俺は黙ってそのあとについていった。

「ここでなにをするんだ？」

ヤスダは万年床に腰を下ろすと俺を蔑んだ目で見て答えた。

「ギャンブルは好きか？」

俺は頷いた。「ギャンブルをやるのか？」

「ここにランプがある。サイコロもあるし花札もある。さあ、なにがやりたい？」

「手っ取り早く済ませたいんだ」

「じゃあチンチロか？ でもそれはいくらなんでもつまらないだろう。ブラックジャックにするか？」

「……ポーカー」

「ポーカーをやるのか？」

「インディアンポーカーだ。知ってるか？」

「馬鹿にしてんのか、殺すぞ」

ヤスダの淀んだ目に一瞬、鋭く曳光が走った。俺はその目に射抜かれてしまった。

それからルールを確認し、俺は勝負する金がそもそもなかったの
でヤスダから十万借り、勝負が始まった。

「聞こえなかったのか、五万だよ」

俺は動揺を隠そうとヤスダに向かって笑いかけた。「ナメてると痛い目を見るぜ」というニュアンスを含ませたつもりだったが、鏡で確認しなくても自分でもわかるほどの不自然なアルカイックスマイルになっていた。

これはどう考えても俺を釣ろうとしている。ヤスダの手はダイヤの6だ。それとも俺のカードが5以下なのか。俺は長考の後、自分が降りなければいいのだという結論に達しヤスダの目を見て「八万」と言った。

「ずいぶんと自信があるようだ」

ヤスダはそれから「十万」と言った。ここで降りたら五万を払うことになる。俺はチラと足下にある札を見た。十万と少しあるようだった。でもこのままではいけない。俺はヤスダから十万を借りてスタートしたのでアガリは数万ということになる。もっと大きく勝たなければならぬ。ということはこの回が千載一遇のチャンスなんじゃないかと俺は考えた。

チャンスだとはわかっていても、十万の大台に乗ったレートをさらに引き上げるのはかなりの勇気が要った。俺はふうと大きく息を吐きそれから「十五万」とヤスダに告げた。

「大きく出るな、俺、そんなに弱い役なのかなあ」

ヤスダはそれでもニヤニヤと笑っている。

俺は開いた口が塞がらなかった。全身に悪寒が走り眩暈のようなものを覚え、とてもカードを直視できなかった。

俺のカードはクラブの6だった。調子に乗ってレートをつり上げたのが思い切り裏目に出た。持ち金はすべて溶け、残ったのはさらに数十万と増えた負債だけだった。

おかしい、こんな微妙な数字なのになぜヤスダはここまでレートを上げたんだ？ それも最初から五万だなんて大きく勝負に出るだなんて。まるで自分の手札が見えているようにしか思えない。俺はなににもできぬまままだヤスダの顔をじっと見ていた。ヤスダはいまにも吹き出しそうになりながらもどうにかそれを堪えているような顔で俺を見返した。

「ハッハ、入り用だつてのに悪いなあ。さて、素寒貧のお前はどうかやって俺に金を払うんだ？」

ヤスダから突きつけられた現実には俺はいまにも泣き出しそうだった。もうなにもかもが終わりだ、自分の軽率な行動から人生まで狂わせてしまった。

「……まあ、そうだな、金がないなら稼いでもらうしかないな。幸いにもと言うべきか、お前はなかなかどうしてルックスがいいから向いてるかもしれない」ヤスダはそう言うと言と携帯電話を取りどこかに電話をかけたようだった。「俺が仕事を紹介してやるよ」

通話が終わりヤスダは俺を見た。相変わらずニヤニヤしていてしまりの悪い顔をしている。

「俺はなにをすればいいんだ？」

ヤスダにそう訊ねると少し驚いたような顔になり「話が早いな」と呟いた。

「お前にはジゴロをやってもらう」

「ジゴロ？」

「女の人とデートをしたりして喜ばせる仕事だ。具体的な内容はそのお客によるから、ここではなんとも言えない。頑張れば一ヶ月で全てがチャラになる」

「なんだか手放して引き受けたら痛い目を見るような気がする。なんとなくだが、そう思った。」

「どうする…… つつても断れるわけではないよな」

俺は曖昧に頷いた。そう、俺に選択の余地はない。

「俺が紹介した奴は、みんな一生懸命働くって評判なんだ」

ヤスダはそう言う俺に名刺を差し出した。遠藤由梨と書いてあった。

「ここに書いてある場所へ行つて話を聞いてくるんだ。今から行けばちょうどいい時間になるんじゃないか」

俺はこの流れに抗うこともできぬままヤスダの家を出た。そのあとは川の流れに身を任せるように名刺に書いてある住所を尋ねた。

目の前に紅茶が出された。三十代半ばと見られる女性は俺の向かいのソファに座り、自分の紅茶を一口飲んだ。格好も雰囲気も清楚な印象だったが、身につけているアクセサリーや小物がどれも高価なものようで、そこからフェロモンとは違うなにか「危険な香り」のようなものを感じた。化粧は薄く、無理に若作りをしていないがそれでもまだまだ容姿は崩れておらず美人の類に入るのではないだろうか。彼女はエンドウと名乗った。名刺に書いてある名前と同じだった。

「ヤスダ君の紹介ね。あなたも彼に負けたクチなの？」

えっ、と僕は遠藤を見た。彼女はふふっと笑った。

「彼に勝とうとするなんて無茶よ、彼は絶対に負けないわ」

「というところ？」

「なにで勝負したのかは知らないけど、彼の持っている雀牌、トランプ、花札、ウノ……要するにすべてのモノの特徴を覚えているの。傷やヨレ具合なんかをね」

あのガン牌野郎！ 俺は思わず立ち上がりかけ、腰を少し浮かせたところで遠藤がそれを手で制した。

「気持ちわかるけど、負けは負け。早速仕事の話をさせてもらうわよ」

俺はまたソファに腰を沈めて紅茶を一口飲んだ。ほんのりと甘くそれなりに気分が落ち着いた。

「やってもらう仕事は簡単に言えば援助交際のようなもの。でも相手はウチのお得意様だし、それなりに地位もある人たちばかりだから充分に格好や言動には注意を払って。あなたに支払う報酬は銀行振り込みで、そのお客様がウチに払った料金の三割になるわ。残り五割がウチ、二割がヤスタ君に行くことになるわ。それと、お客様があなた個人になにかを買ってあげた、とかそういう場合は自己責任でそれを受け取ってもらうわ。もちろん、断ってもいいしね」

遠藤はそこで言葉を切って俺の目を見た。俺は目を逸らして眼前の紅茶をじつと見た。ヤスタにもマージンが入るのか。それも二割も。体のいいピンハネじゃねえかと思ったが、借金している身なのでなにも言えなかった。ちよつと待て、借金？ あいつはガン牌トランプで勝って俺をここに紹介した。初めからここで働かせるハラだったのだ。俺以外にも一体どれだけの人がハメられたらう。汚ねえやり方だ。

「ちよつと」

俺はハッと顔を上げた。遠藤が心配そうにこちらを見ている。

「質問がないなら終わりにするけど……仕事はその都度電話で知らせるわ」

「あ、はい、わかりました」

俺は部屋を出てエレベーターに乗った。こんなマンションの一室

に売春斡旋事務所があるだなんて思いもしなかったな。おまけに自分がそこでジゴロになるだなんて……。

家に帰るとすぐベッドに倒れた。晩メシにするにはもう遅いくらいの時間だった。今日はこのまま寝てしまおう。いろいろと思うところはあがるが、これしか方法はない。俺は数日ぶりにマスターベーションをせずに寝た。これがプロ意識というやつなのだろうか？

俺の最初の客はタチバナという、品のいい、それでどこか幸の薄そうな人だった。歳は四十一と言っていたが、それよりはもう少し若く見えた。俺がそう言っていると彼女は少女のようににはいかんだ。

彼女とは駅の改札を出たところにあるカフェで待ち合わせをした。その駅は俺の住んでいるところの最寄り駅だったので、知り合いに会うのではと少し警戒していたが時間になるとすぐに彼女は会うことができた。

軽く話をしながらウィンドウショッピングをして高そうなレストランで食事をし、それからこれもまた高そうなバーで酒を飲んだ。彼女はモスコ・ミュールを一杯飲んだだけで顔を真っ赤にした。

「ねえ、こんなおばさんでも抱いてくれるの？」

「おばさんだなんてそんな……あなたが望むなら」

俺は彼女の手をそっと握った。「それが仕事ですから」と思いはしたが口には出さなかった。タチバナは会計を済ますと「ついてきて」と言って店を出た。俺は慌ててその後を追った。

夜風の冷たい夜だった。上気した顔から熱が去っていく。それでも内面からまた顔を火照らせる。タチバナと俺は手を繋いで歩いていた。繁華街から一本道を外れると、腿のつけ根が見えそうなほど短くタイトなスカートを穿いた中国人やフィリピン人の女がポン引きをしていた。どこからか古い油のような臭いと悪趣味な香水の臭いと腋臭の臭いが混ざったような、ドブ臭いとも言えないのか

よくわからない臭いが鼻をかすめる。まさに「裏通りの臭い」といったところか。だが、いまの俺にはそんな臭いが心地よく感じられた。カタギではないという意識がそうさせるのか、俺にはよくわからない。

さらに奥へと歩いていくとネオンが妖しく輝くホテル街へ出た。

通り過ぎる人たちからは性の本能のような、動物的なものが表情や身体から滲み出ているようで、俺はまるで臭いものを嗅いだときのような気持ちになった。タチバナは俺の手をしっかりと握って離さなかった。そうして黙って歩いている。

「ここでいいかしら」

そこは周りと比べても新しく見えるホテルだった。俺は「いいですよ」と言い、手を繋いだまま中へ入った。受け付けを済ませて部屋に入る。ここに来たからにはすることといえばひとつだけしかないのに、それをひた隠しにしようとゴテゴテにいろいろと装飾したような部屋だった。浅ましいというか往生際が悪いというか、俺はあまりいい印象を持たなかったが、タチバナは気に入ったようで目を輝かせてベッドやらカーテンやら、そのほかジャグジーなどひとつひとつに対して感動していた。

女性を抱くのは久しぶりだった。最後に抱いた女性は大学の同年の女の子だったので、いまこうしてタチバナを抱きしめているとその肌の感触や匂いの違いに驚かされた。人それぞれなにかしら差があるにしても、俺はここまで年の離れた人を抱くのは初めてなのでそれまでの女の子はみんな似たり寄ったりとまではいえないにせよ、おおかた同じ分類になると思った。

長い長い行為だった。ポリネシアン・セックスのようにゆっくりじっくり味わうようだった。その間お互いに口をきかず、部屋には息が漏れる声だけが彷徨うように漂い、消えていった。

彼女がシャワーからあがると俺もすぐにシャワーを浴びた。ついにしてしまったかと俺は考えていた。別に後ろめたい気持ちがあるわけではないが、それでも避けて通れる道ならば俺は通らなかった

だろうなと思った。シャワーを浴びても気分はすっきりしなかった。まるで全身にさつき通った裏通りの臭いがへばりついていてような感じがして不快だった。

「どうしたの？」

タチバナは俺の気持ちを察したのか、コーヒーを淹れて待っていた。俺は気持ちを切り替えて「なんでもないよ」と微笑んだ。

コーヒーを飲みながら二人で取り留めのない話をしていると、タチバナは「少し眠っていいかな」と言った。残っている、薄くて、苦いというより酸っぱいコーヒーを飲み干すと、タチバナとベッドに入り俺は腕枕をして二人で眠った。夜が明けるとタチバナが料金を払い、二人でホテルを出た。駅まではまた手を繋いで歩いていた。ラッシュアワーの前だったが駅は混んでいた。「わたしはここで」と彼女は言い、俺の手を離れた。

「ありがとう、すごくいい一夜だった。また会ったときはよろしくね」

彼女はそう言うと言残惜しそうに俺からそつと目を逸らし、そのまま背を向けて歩いていった。俺は見えなくなるまで彼女を見送るとふう、とため息をつき帰路へついた。

それから順調に仕事が舞い込んできた。タチバナのように一夜を共にすることもあればディナーだけの人もいた。さらにマニアックなプレイを望む客もいて、俺はそれを断ることもできずに受け入れていった。

クドウという三十代の客がいた。彼女はランジェリーショップの社長だった。俺は一流のホテルのロビーで彼女と待ち合わせていた。宿泊客と思われる人もボーイも、誰も彼もが気品という見えないヴェールを身にまといているように感じられ、俺は居心地が悪く早く来てくれと心で散々祈った。

ファッションに疎い俺にはアヴァンギャルドとしか言いようのない服装でクドウは俺の前に来た。全身を赤で包み、それは挑発的というよりも暴力的でさえあった。彼女は「お待たせ」とだけ言うところりと背を向けてチェックインをした。

彼女についていった先はテレビなどで見ては「俺には一生縁がないだろうな」と思っていたようなスイートルームだった。俺はただ啞然とするしかなかった。

「こういうところ、初めて？」

妙に高圧的な声でクドウは訊ねた。俺は「はい」といささか緊張しながらそう答えた。

「じゃあ、こういうことも初めてなのかな」

彼女はおもむろに服を脱ぎ、やがて全裸になった。それから俺をじつと見る。「早く脱げ」と目で言われているようだった。俺が黙って全裸になると、彼女は手招きをして俺を床に寝かしつけた。

「あ、あの」と俺が言っていると「黙ってなさい」とクドウは言った。それから俺の顔の上で股を開き、そのまま腰を下ろした。鼻に彼女の陰毛のチクチクとした感触がする。息をする度に汗ばんだような匂いがしてそれが妙に艶かしく、俺はそれだけで勃起した。

「やっぱり若いっていいわね」クドウはふふつと笑うと「全部飲むのよ、こぼしたらおしおきよ」と言い、俺の口の中にシヨンベンをし始めた。生温かい液体が喉を通る。反射的に飲み込もうとするがそのときに呼吸もしてしまい、シヨンベンが気管に入った。そのままむせるとその勢いで鼻から鼻水と一緒にクドウの聖水が吹き出した。

「こぼしたらおしおきだって言ったわよね」

クドウはむせ返る俺のことなど気にも留めずそう言った。腐った野菜の詰まった冷蔵庫に三日置いておいた食塩水のような味のするシヨンベンは、スイートルームの見るからに高級そうなカーペットのあちこちに大きな染みを作った。

ひとしきりむせて俺が落ち着いたのを見ると、クドウは「四つん

ばいになりなさい」と言った。チラと見えた右手には注射器が握られていた。

俺はなにをされるのかわかったものではないと怯えながらも、言われるがままその場に四つんばいになった。その瞬間、突如として肛門に激痛が走った。言葉にならないうめき声をあげ、膝が崩れたときに腸が音を立ててなにかを必死で吸収しているのがわかった。

「なにをした……あつ」

立ち上がると強烈な眩暈に襲われた。それをどうにか堪えると、今度は妙に気持ち昂ぶり全てのものを破壊してやりたくなるような衝動に駆られた。

「なにつて、コカインを入れただけよ」クドウはすました顔でそう言つと、自分も白い粉を紙に少量広げてスニツフィングした。

「さあ、このままわたしを気持ちよくしなさい！」

俺はその言葉がゴングであるかのように彼女に向かっていき半ばレイプのように強引に挿入し、勢いよく突き上げた。俺が突く度に彼女は死にそうなほど激しく乱れ、全身を戦慄かせた。

二人同時に果てた。それと同時にどうしようもないほどの疲労感を覚え、二人でそのまま眠ってしまった。

チェックアウトを済ませてホテルの外へ出た。彼女とはそこで別れた。去り際に彼女は「とっておきなさい」と俺に一万円札を五枚握らせた。礼を言う間も与えずに彼女は都会の人混みの中へ溶けていつてしまった。

壮絶な一夜だったなと俺は昨晚のことを思い出そうとしたが、記憶にあるのはがむしゃらだったことくらいで細かいことはよく覚えてなかった。まあいいやと俺は近くのカフェに入りアイスコーヒーを注文した。煙草に火を点けて紫煙を吐いたころにはすべてがどうでもいい気持ちになった。

ヤスダへの返済も使い込んだ奨学金も、順調にことは運んでいた。確かに割のいい仕事かもしれないがそれでもその分、過酷な仕事だとも言える。

クドウと会ってから、なぜだかはわからないが一段と忙しくなってきた。ダブルブッキングした日もあったし、それでなくても大学へ行く余裕もあまりなくなっていた。

「あなた、結構人気あるのよ」

遠藤にはそう言われたが、自分ではいまひとつピンとくるものはなかった。

遠藤が言う忙しくなった理由のひとつに、俺は客の要望を拒まないということがあった。確かに俺はこの仕事でいろいろなことをした。たくさんのがあった。ゲイの男にケツを掘られ、それを見ながら客である女がマスターベーションをしたり、強烈な臭い、死んだザリガニを握りつぶした雑巾のような臭いのする女の股をクンニリングスしたり、腕を天井に吊された女の身体を的にしてダーツをしたりとどういう人生を歩めばそういう発想に至るのか、と疑問に思うような人々の性癖を満たしてきた。

しかしそれらは俺からすればそれらはどうでもいいことで、重要なのは俺がまた一からやり直し、真つ当なステージに再び上がることに、それだけだった。この仕事はそれまでの通過儀礼のようなものに過ぎない。

もちろん、断ることだってできたはずだがそれをするのは借金を抱えている身分でということもあるが、こうして金で男を買わなければ欲求を満足させることもできない彼女たちをさらに精神的に追い込んでしまうような気がしたというのが正直なところなのかもしれない。

この仕事を始めてから一ヶ月が過ぎようとしているころ、珍しく数日の間遠藤から連絡が来なかった。俺はある性病にかかったので

しばらく休みを貰おうと、遠藤に連絡したが電話は繋がらなかった。返済はどうするかと俺は引きだしに突っ込んである一万円札の枚数を数えた。いつの間にか三十万円近くになっていた。俺はそこから十万円だけ抜くと、サンダルを突っかけてヤスダの家に行った。インターフォンを押しても、ドアをノックしても、なにも音沙汰がなかった。俺は郵便受けに一万円札をねじ込むとそのままその場から立ち去った。

帰る道中、俺にヤスダを紹介した先輩に会った。「知ってるか」と先輩は俺の顔を見るなり言ってきた。

「ヤスダの野郎、パクられたってよ」

俺は「そうですか」とだけ言い、会釈をしてまた歩きはじめた。辟易とするほどの晴天だというのに外に出ている人はいなかった。誰もいない街で俺の影だけが揺らめいている。

「ここから始めよう」

俺は影に向かってそう呟くと真っ直ぐに家へ向かった。

それにしても股間が痒い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5609v/>

ジゴロ

2011年8月7日03時22分発行